
中国江南の蛇信仰と日本

諏訪 春 雄

キーワード 『雨月物語』『蛇性の姪』 道成寺伝説 白蛇伝 「白娘子永鎮雷峰塔」 宝巻 浙江省 蛇トーテミズム 越人の蛇信仰 江南 蛇郎伝説 蛇婿入 蛇巫 常陸風土記 蛇女房

要 旨 上田秋成の名作『雨月物語』『蛇性の姪』の女主人公真名兎は蛇の身でありながら、人間の男性に恋し、姿を変え、形を変えて付きまとうが、最後には紀伊国の道成寺の法海和尚の法力によって退治されてしまう。そこには蛇を忌避して、蛇と人間との恋愛など許されるはずもないとする仏教的な畜生観が反映している。このような蛇を忌避する思想はこの作の典拠となった中国明代の白話小説にもはっきりとあらわれており、秋成はその思想に共鳴して、自作に取り入れている。しかし、中国の江南地方には紀元三世紀のころまで呉、越の国が栄えており、ことに越の人々は蛇を祖神としてあがめていた。白蛇と人間の若者との恋を主題とする白蛇伝や同じく蛇と人間との愛をあつかった蛇郎伝説などは、この越の人々によって生み出され、かれらによって中国全土にひろめられていった。それらの伝承の世界には知識人の手になる白話小説などには見られない蛇に対する崇拜の情がある。この江南の蛇信仰は呉、越の人々の日本移住とともに日本へも伝えられた可能性が強い。縄文から弥生にかけての時代に行われていた蛇巫は現在も江南の地に存在するし、中国の蛇郎伝説は日本の蛇婿入りの昔話となり、「蛇性の姪」に結晶した白蛇伝もかなり早い時期に中国から輸入され、昔話の世界で日本的に変容していたとみることができる。

上田秋成の『雨月物語』

紀伊の国新宮の大宅豊雄は、雨宿りのおりに知り合った美しい未亡人^{あなご}の真名児とふかい契りをおかわしたが、かの女から贈られた太刀が熊野権現の宝物殿から盗まれた品であったために咎めを受けた。

豊雄は姉のつぎ先である大和の石^{いし}櫛市へ移って傷心の日々を送っていたが、長谷寺詣でのさいに真名児と再開、ふたたび愛欲の淵に沈んだ。

弥生^{やよい}の一日、豊雄と真名児は吉野に遊んだ。そこで真名児は天^{あま}和^わ神社の老神官^{おきな}当麻^{あま}の酒人^{さけびと}にその正体が蛇であることを見抜かれて、かたわらの滝に飛び込んで姿を消した。豊雄は芝の里の庄司の婿となって新しい生活の一步を踏み出す決意を固めた。しかし、結婚二日目の晩、豊雄がたむれかかった新妻の富子には真名児が乗り移っていた。異変を知った庄司夫妻の勧めで祈禱してもらった鞍馬の修験者は、真名児の毒気にあてられ、黒焦げとなって死んだ。

いまは覚悟をきめて真名児とともにいずこへでも行こうとした豊雄に、庄司はさらに道成寺の法海和尚を紹介した。法海和尚の教えのままに、豊雄が真名児を法衣で押し伏せると、法海和尚はその真名児と眷属の小蛇を鉄鉢のなかに封じ込めた。

よく知られている上田秋成の『雨月物語』の第四話「蛇性の姪」である。

この「蛇性の姪」では豊雄と真名児との結び付きは徹底的に忌避されており、真名児は畜生の身でありながら人間の男に思いをかける恐るべき魔性として造型され、最後は、法海和尚の法力によって退治される。江戸時代人の、そして作者秋成個人の蛇にたいする観念は、作品中に登場する当麻の酒人の

此の邪^{あま}神^{かみ}は年経たる蛇^{へび}なり、かれが性^{さが}は姪^{まへ}なる物にて、牛^{うし}と犖^{うら}みて鱗^{うろこ}を生み、馬^{うま}とあひては龍^{りゆう}馬^ばを生むといへり。此の魅^まはせつるも、はたその秀麗^{しゅうれい}に姪^{まへ}たると見えたり。かくまで執^{しつ}ねきをよく慎^{しん}み給はずば、おそらくは命^{いのち}を失^うひ給ふべし。

ということばに尽くされている。鱗を生み、龍馬を生むというところには、蛇の不可思議な力にたいする畏敬の念が読み取れるが、全体を覆う嫌悪の情は否定しようもない。

この作品の典拠としては日本の道成寺伝説や中国の「白蛇伝」がこれまでに指摘されている。

道成寺伝説はよく知られているように、和歌山県日高郡川辺町鐘巻に現存する道成寺にまつわる縁起談で、同寺が所蔵する「道成寺縁起」⁽¹⁾によってその内容は尽くされている。紀伊の国室の郡真砂の清沢庄司の女房は同家に宿を取った熊野詣での美しい僧に恋をし、僧の下山を待つが、逃げられてあとを追ひ、日高川を蛇身となって泳ぎ渡った。僧は道成寺に逃げこみ、寺僧に助けを求めて釣り鐘のなかに身を隠したが、蛇身の女は鐘を巻いて火焰で僧を焼き殺した。その結果、僧も蛇に転生し、女と夫婦になり、ある夜の寺僧の夢にふたりであらわれ、「法華経」の書写供養を依頼する。寺では盛大な法会をいとなみ、ふたりは天人に生まれ変わることができた。

この伝説は「法華経」の功德を説くはなしとなっており、仏教の輪廻転生観から蛇身になることは罪深い前世の業の結果としている。女は地獄の使いの悪女であり、かの女の転じた蛇は「大毒蛇」であって、もちろん蛇と人間との恋愛などはとうてい許せないこととされている。最後に真名児を退治する徳の高い僧として道成寺の法海和尚が登場することからも明らかかなよう

に、『雨月物語』の蛇性観の中心がこの仏教的な畜生観の流れのなかにあることは確かであるが、しかし、それだけで尽くされはしない。

真名児がもし蛇でなくて人間であったらどうであろうか。あらゆる束縛や世間の常識を振り捨ててひたすらに、全身的にひとりの男を愛し続けるその行動力はむしろさわやかですらあり、最後にかの女の愛が達成されないで終わるときに、われわれはふかい哀れみの情をかの人に感じるのである。それは作者秋成が意識せず真名児に託した造型であるとともに、真名児にまで流れつた日本人の伝統的な動物観の反映でもあるはずである。

『雨月物語』の「蛇性の姪」の典拠

「白蛇伝」は中国で国民的な広がりを持っている著名な伝説である。「西遊記」、「水滸伝」、「孟姜女」などに匹敵する国民伝説といつていい。

その発生地は浙江省の西湖のほりであるが、説話、説教、小説、演劇などにも取り入れられて広く流布している。

秋成が演劇や説教に触れた可能性はほとんど考えられないので、かれが『雨月物語』の直接の粉本としたのは、明代の白話小説集『警世通言』⁽²⁾第二十八話「白娘子永鎮雷峰塔」であり、そのほかに清代の白話小説集『西湖佳話』巻十五の「雷峰怪蹟」も参照されたい。

宋代の紹興年間のこと。杭州臨安府のおじの薬屋で働く青年許宣は、祖先を祭る清明節の日、西湖のほとりの保叔塔寺へ墓参りにおもむいた帰り道、にわか雨のなかで侍女青青を伴った美しい婦人白娘子と出会い、同じ船に乗合せて傘を貸したのがきっかけで、結婚の約束をかわした。しかし、結婚費用として白娘子がわたしてくれた銀子はその地を支配する邵太尉の庫から紛失したものであったことが明らかとなり、白娘子主従は姿を消し、許宣は捕えられて蘇州府に流された。

許宣のあとを白娘子が追ってきて、ふたりは結ばれた。四月八日、釈迦誕生会の日、許宣は承天寺へ参詣に行こうとして白娘子から与えられた衣装を着てでかけたところ、それがその地の商人の質蔵から紛失したものであったために、ふたたび捕えられて鎮江府に流された。そこへも白娘子が現れ、ふたりはよりをもどした。

土地の名刹金山寺に遊んだおりに、高僧法海和尚に出会った白娘子と青青はやにわに江中に身を投じて姿を消した。孝宗の即位の恩赦によって許宣が杭州の姉夫婦のところにもどったところ、白娘子主従が待っていた。その正体に気付いた許宣が助けを求めた蛇捕りの名人も毒気に当てられて死に、逃れることもできず、入水自殺しようとして法海和尚に救われた。許宣が法海から与えられた鉄鉢で白娘子を押さえつけると、白娘子の身体はちいさく縮んでそのなかに収まった。法海和尚は白娘子の正体が太蛇であり、青青は千年を経た青魚であることを明らかにし、西湖のほとりの雷峰寺のまえに埋め、その上に塔を建てた。

「白娘子永鎮雷峰塔」の梗概である。秋成の「蛇性の姪」とほとんど同様な筋の展開であり、蛇と人間との恋を否定する観点も共通している。秋成がこの作品によって筋を構えたからには、「蛇性の姪」の動物婚忌避の思想が生まれてくるのも当然である。

しかし、時間的にも空間的にも大きな広がりを持つ中国の「白蛇伝」の種々の形を検討してみると、すべてが同一の思想で貫かれているのではないことに気がつく。

「白蛇伝」の古型

中国の「白蛇伝」には多くのバリエーションがある。それらのなかには、白娘子と許宣との愛を祝福しているものもあれば、動物と人間の結婚によって愛の結晶が生まれる筋としている作品もある。はやく近藤忠義氏が紹介している⁽³⁾ 浙江省の銭塘県で行われている宝巻^{ほうかん}がその典型例である。正式には「浙江省杭州府銭塘県雷峰塔宝巻」という。

宝巻は、叩き鐘、拍子木その他の素朴な伴奏楽器を使ってふしをつけて語る舌耕芸能である。わが国の説教浄瑠璃などと同様に、唐代の変文を源流とする仏教宣伝の唱導文芸であるが、のちには仏教以外の故事、伝説、説話の類をもひろく題材とするようになった。これと源流をひとつにして、もっと音楽性を強めたものに宣巻がある。こちらのほうは弦楽器なども使用して、原則として韻文で表現される。私は、この宣巻は、一九九〇年の夏に江蘇省の青海省でその上演の実際を見聞したことがあるが、宝巻のほうはまだ経験がない。

北宋の真宗の時代のことである。峨眉山中で千七百年の修行を積んだ白蛇白素貞は、かの女が山にこもった千七百年以前の先世に、自分の命を救ってくれた樵夫の生れ変わりである杭州の若者許宣の恩に報いるために下界に下る。その途中、千年の修行を積んだ青蛇の小青と戦って破り、侍女とした。

清明節の日、墓参りの帰りの許宣と雨の船中で出会った白氏は、小青の仲介で結婚することができた。しかし、結婚の費用として白氏の与えた金が盗まれたものであったために、許宣は罪に問われ、蘇州の地に流された。白氏は蘇州まであとを追ってきて薬屋を開き、ふたりは仕合わせに暮らす。

端午の節句がやってきた。その日、気分のすぐれない妻の様子を心配した許宣は雄黄酒という薬酒をすすめた。夫の愛情にほだされて酒を飲んだ白氏は正体を現して一条の白蛇となった。それを見た許宣は驚きのあまり息が絶えてしまった。夫の命を救う仙草を入手するため、雲に乗って天の南極宮を訪れた白氏は、門番の鶴と死闘を展開するが、南極仙翁の助けを得て、仙草を持って帰る。しかも、腰帯を白蛇に変じさせ、それを断ち切って夫の疑惑をもらすことができた。

白氏の正体を見抜いた金山寺の法海和尚は、許宣を寺にとどめて出家させようとする。許宣を取り戻そうとする白、青二蛇と法力を駆使する法海とのはげしい戦いがつづいたが、白氏はひとまず夫を伴って杭州の許宣の姉許大娘のもとに逃れた。そこで白氏は許宣の子を生み、夢蛟と名付けた。そこへ法海が訪れ、産後で通力の衰えていた白氏を宝鉢に封じ込めてしまった。

このあと、ストーリーは妻を失った許宣と母を無くした夢蛟がひたすらに白氏を慕い続ける物語として進展していく。ことに許宣の姉の許大娘は愛しあう弟夫婦の仲を無残に割いた悪人として法海を非難し、また小青も峨眉山中にこもって修行を重ねて通力を増したうえで執拗な戦いを法海にたいして挑んでいく。このような展開のなかで法海は徳の高い名僧でありつづけることはできず、愛の貫徹を妨げた悪人としての相貌を備えていく。そのような法海観を徹底させると、最後に法海は蟹の腹のなかに閉じ込められたり、叩き殺されたりして終わることになる。このように民衆のあいだに行われていた法海敵役観を知るために、「白蛇伝」の舞台となった浙江地方の民間伝説のいくつかを紹介しよう。恐らくこれらが白蛇伝の古いかたちを伝え

るものであろう。

(前略) 小青は修業をつんで再び法海に闘いをいどみ、小青が剣を揮うと雷峰塔は崩壊し、白娘子がとび出して来て闘いに加わった。逃げる法海は西湖に落ちた。これを見た白娘子は金の簪をとって令旗とし、頭上で後方に三度振ると湖水が乾上って来た。法海は身を隠そうとして、蟹の腹の下の縫い目にもぐり込む。こうして法海和尚は蟹の腹のなかに閉じ込められ、もう出れなくなった。元来、蟹はまっすぐ歩いたのであるが、腹のなかに横行霸道の法海が入ってからは、もう真直ぐ歩けず横ばいするようになった。今でも蟹の殻をはぐと、中に禿頭の和尚がいるが、これが法海である。

これは大林太良氏が紹介されている⁽⁴⁾ 西湖地方の伝説の結末である。法海の前身は西湖に生息していた烏龜で、そのときに白蛇にやっつけられた恨みを報じるために人間に姿を変えて祟ったことになっている。

これとは別におなじ浙江省の寧波地方にはつぎのようなかたちのはなしも伝えられている⁽⁵⁾。

もともと白素貞は国境の関の長官の娘で、絶世の美貌、学問のほか武芸にもすぐれ、さらに医薬の知識にも達していた。かの女が十六歳になったとし、父がざん言されて罪せられ、召使の小青とともに流浪の身となる。杭州の西湖のほとりで雨のなかに傘を貸してくれた許仙と知りあい、恋におちてふたりは夫婦となった。そして、杭州で薬屋を開いて一年たったとき、鎮江一帯に悪疫が流行し、夫婦は安い料金を施薬に活躍し、人々から感謝された。

当時、鎮江の金山寺の法海和尚は医薬の心得があり、常々それを利用して蓄財につとめていたが、この悪疫流行のさいには、白娘子夫妻のためにもうけそこない、ふたりをふかく恨んだ。白娘子と小青が留守のときに許仙をたずねた法海は、ふたりが千年を経た蛇の化身であると吹き込み、信じようとしないう許仙にもしおまへの妻が人間ならなぜかの女は姓を明かさないとせまった。父が罪を受けたために白娘子が姓を隠している事情を知らない許仙は、ここで法海のことばを信じるようになった。さらに、法海は蛇のきらう薬物の雄黄をわたし、端午の節句の日これを家中にまきちらすように教えた。

端午の日、許仙のすすめる雄黄酒で気分が悪くなった白娘子へ、許仙はさらにもぐさの煙を焚きつけた。そのとき、部屋の軒に一条の大蛇がぶらさがった。それを見た許仙はそのまま気絶死してしまった。これは実は法海があらかじめ許仙の家に放っておいた蛇であった。

白娘子は死んだ夫を救うために、峨眉山上から仙草を盗みだす冒険の旅に出る。

はなしはここまでで終わっている。白娘子を人間の女とするところには、後世の変化が加わっているが、法海を悪計の限りをつくして二人の愛を妨げる悪人としている。民衆の願望がどこにあったかをよく示している。

もう一話、先程の大林氏紹介のはなしと類似性のある伝説を引用してみよう⁽⁶⁾。やはり、寧波地方につたわるものである。

白蛇と月の光を奪いあって敗れたかえるの精は、ふかく白蛇を恨んで復讐の機会をねらっていた。ある日、鎮江の金山寺を訪れたかえるの精は、法海和尚が座禅しているのを見て、その靈魂がすでに身体から抜け出して、天に上っていることを知り、その身体に入り込んで偽の法海になりました。

偽法海は真の法海の宝器の照妖鏡を手に入れ、白蛇が結婚している許仙の店に行って、許仙にむかい、「おまへの身体は妖気に満ちている。おまへの妻は人ではなく、蛇であり、このままいっしょに暮らせばおまへの死。端午の日に、雄黄焼酒を飲ませれば正体を現わす

であろう」と告げた。そのことばにしたがって、端午の日に許仙は妻に酒を飲ませたところ、妻は蛇の正体を現わし、驚いた許仙はショック死してしまった。しかし、酔いから覚めた白蛇は崑崙山から仙草を盗みだし、許仙の命を救った。

執拗に白蛇の命をねらう偽法海は金山寺に許仙をとらえ、人質とした。白蛇は凶悪なかえるの精と対抗するために、法術を用いて、金山を水びたしにして、許仙を救ったが、百姓や動物たちも多く死んだ。それらの靈魂が地獄の閻魔王にこのことを訴えたので、閻魔王は天の玉帝にとりついだ。玉帝は韋馱天を派遣して白蛇を捕らえさせることにした。韋馱天は鉢のなかに白蛇を入れ、杭州の雷峰塔の下に埋めた。

十八年後、白蛇の息子白状元が、この塔のもとに来て、泣きながら、法海和尚の悪巧みによって母が塔の下に閉じ込められたことを訴えると、そのことばが、雲路を通りかかった真の法海の耳にはいった。驚いた真の法海は、金山寺におもむき、自分の身体のかなからかえるの精を追いついて打ち殺してしまった。そのあと塔の下から白蛇を救い出したが、そのときに雷峰塔は傾いたままになってしまった。

状元は朝廷の官吏に出世し、許仙は法海和尚について修行し、のち白蛇とともに天宮で仙人になったという。

このはなしは、白蛇に悪意を抱くかえるの精を登場させ、法海和尚の脱仙後の抜殻に入り込んでいろいろな悪事を働くこととしている。この点では、法海を、やはり白蛇に悪意を持つ烏龜の化身とした大林氏紹介のはなしとよく似ているが、別に真の法海を善玉として活躍させているところには、後世的な作為がある。このほかにも、白蛇を観音菩薩の化身とする仏教の影響下にある伝えも寧波地方に行われている⁽⁷⁾。いずれにしても、民衆の想像力のもとでは、蛇と人間の結婚は祝福すべきものとされている。

現在、中国の粵劇や川劇で行われる白蛇伝もまた似たような筋となっていて、最後は小青らの活躍で雷峰塔が破壊され、下に閉じ込められた白娘子が美しい姿を現して劇は終結している。

中国の蛇トーテミズム

中国の民衆の想像力のなかでは、蛇と人間の愛は是認され、両者の結婚は祝福されてきた。ふたりの愛を妨げる法海は悪人とされ、かれは最後にきびしい報復を受けている。法海が徳の高い坊さんになっていくのは、のちの明代、清代の知識人の手が加わった小説のなかの出来事であって、土俗的な民衆レベルの伝承のなかでは悪役にすぎなかった。それが本来のかたちであったのであろう。

中国人は、神話や伝説の世界においての、蛇も含めた動物と人間との結婚をかならずしも忌避すべきものとは考えておらず、むしろ歓迎すべきものと思っていたふしがある。英雄や聖人、すぐれた民族や家族は、通常の間人同士の結婚では生まれて来ず、動物の血が導入されなければならないと考えていた。中国人のいう図騰崇拜、つまりトーテミズムである。

中国は漢民族も含めて五十余りの民族から成っている多民族国家である。その各民族のあいだに動物や植物を祖先神とするトーテミズムが多く伝えられている。最近中国で刊行された『中国各民族宗教と神話大詞典』⁽⁸⁾ から民族名とその民族または民族内の氏族が祖先神として崇めている動物の名を、拾い読みして抜き出してみよう。

白族（ペー族）	虎、熊、蛇、鼠
朝鮮族	熊
東郷族（トンシャン族）	ひきがえる
鄂温克族（エヴェンキ族）	水鳥、熊
哈尼族（ハニ族）	蛇
哈薩克族（カザフ族）	狼、白鳥
漢族	龍、蛇、虎、豹
赫哲族（ホジェン族）	虎
苗族（ミャオ族）	蝴蝶
納西族（ナシ族）	蝙蝠、大鵬、猿、鷹、龍、獅子

このように、動物と人間との結婚の神話を伝えている中国が「白蛇伝」のような伝説を育ててきたのは当然である。しかも、右の例から明らかのように、蛇をトーテミズムの対象とする民族は漢族をはじめとして数多い。漢民族が祖神として伝統的に信仰してきた伏羲と女媧は人頭蛇身として表現されているし、漢の高祖にも蛇から生まれたという伝説がまつわりついている。

中国社会に道教や仏教、儒教が浸透していくと、中国人の蛇信仰もその影響を受けて大きく変容していく。伝統的な蛇を神として崇める観念もそのまま温存される一方では、蛇を邪悪視する考え方も優勢になってくる。そうした中国人の複雑な蛇観の実態は唐代、宋代、明代などに大量に制作された伝奇志怪小説の類にうかがうことができる。

宋代の洪邁が編纂した『夷堅志』⁽⁹⁾ から具体例を拾いだしてみよう。

朝、蛇の姿を見ることは吉兆であった。しかも、その蛇が大きければ大きいほどめでたいことであった（乙志卷八）。しかし、こういう例は少なく、むしろ、蛇を邪悪視する例が圧倒的に多くなっている。巨大な蛇が天井の棟にぶらさがっているのを見た人は三日後に亡くなっている（丁志卷三）。蛇は好色の動物であつてしばしば人間の男女に姿を変えて人間と交わっている（丁志卷二十、戊志卷二・三）。蛇を殺せば祟りがあり（支景卷六）、蛇穴の近くに建築することを妨げ（支乙卷九）、人を惑わし、錯乱させるので巫が呪術を施さなければならなかった（丁志卷二十、支丁卷三）。

蛇信仰についてもうすこし考えてみよう。

中国長江の下流の地域、現在の江蘇、浙江の地にはむかし呉、越の文化がさかえ、ことに日本の古代文化ともふかい関わりが想定されていることは周知の通りである。このことについては、のちに詳述する。この地方には古代から現代にいたるまで、蛇トーテミズムがさかんである。蛇トーテミズムはひろい意味の蛇信仰を生み出す。「白蛇伝」の舞台となった西湖もこの呉、越の地にある。「白蛇伝」誕生の背景を知るためにも、この江南の呉、越の地方の蛇信仰についてみてみる必要がある。

越人の蛇信仰

江南の呉、越の地方は河川が縦横に流れ、沢や沼地が多く、人々は船を主要な交通手段としていた。虫や蛇が多く生息し、人々はその害を避けようとして、これを神として崇め、さらに

一步を進めてこれを民族の祖神としてトーテミズムの対象とした。この地には六、七千年以前から人が住んでおり、有名な浙江の河姆渡遺跡によってその時期のかなり発達した原始文化の存在が証明されている。ここからは大量の陶器類が出土しており、それらには蛇またはそれを抽象化した模様が見られ、この地に古くから蛇信仰のあったことが推定されている⁽¹⁰⁾。

時代が下って文献資料がみられるようになると、それらにはことに越人が蛇を崇拜の対象にした事実が明瞭に記載されている。春秋時代の『呉越春秋』によると、越国に対立した呉国は城をつくる時蛇信仰の越国の侵入をふせぐために「蛇門」を設けたという。また秦漢時代になって、『墨子』や『淮南子』によると、越王勾踐をはじめとして越の人々は髪を短く切り、身体に鱗虫の入れ墨をしていたという。この入れ墨は蛟龍（みずちと龍、つまりは蛇）のかたちを描いたものであり、水にはいったときにその害を防ぐためのものであったという⁽¹¹⁾。

紀元後三世紀のころ、三国魏晋の時代を最後として越の国は歴史上から姿を消していく。南下してくる漢民族に追われて、各地に散っていったと推定されている。現在、中国の少数民族のなかに数えられている黎族、壮族、高山族、さらに広東、広西、福建などの各地で船を住まいとして水上生活を送っている蛋民などがかれらの子孫と考えられている。越人が保持していた蛇信仰は当然この人々のなかに生き延びることになる⁽¹²⁾。

台湾の高山族の婦人たちは、『隋書・琉球伝』をはじめとする歴史書や地理書によると、手に虫や蛇のかたちをした入れ墨をしていたし、また、「亀殻花」と呼ばれる毒蛇をとくに崇拜し、部落の酋長の家では一室を用意して、その巢穴にあてることすらあったという。「蛇郎君」、「五歩蛇」など、いまにいたるまで蛇に関する伝説を多くつたえているのも注目されることである。

海南島地区の黎族は蛇に関わりのある入れ墨をしている。かれらは入れ墨を「美孚」と称しているが、とくに蛇に関わりのあるものを「蟬蛇（大蛇）美孚」と称しているという。広東や広西の各地の蛋民たちは蛇を神として祭っており、神社には蛇の画像がかかげられて、崇拜され、また直接に蛇を祭神とした蛇廟もあったという。

福建省の蛋民は、清代の『侯官郷土志』という記録に「蛇の子孫であり、閩越（福建省の越人）の末である」と記されている。またおなじ清代の別の記録によると、婦人たちに蛇かんざしと呼ばれる五寸ばかりの長さの蛇が鎌首をもたげているかたちの髪飾りを頭にさす習俗があったという。

雲南省に居住する泰族もまた越人の子孫といわれている。かれらはいまも龍をトーテムとし、刺青の風習を持っている。小乗仏教が浸透しており、そのために刺青の模様も仏教についてのものが多いが、伝統の図案は蛇紋である。かれらが龍つまり蛇の子孫と信じているからである⁽¹³⁾。

三世紀以降の漢民族の南下によって、江南の越人は各地に散っていき、蛇にたいする信仰や習俗も、これまでみてきたように、かれらの移住先に残っていくことになるのであるが、われわれ日本人として大きな関心が寄せられるのは、その影響があきらかに日本列島にも及んでいたことである。

江南漢民族の蛇信仰

越の人々の蛇信仰は越人の子孫だけではなく、漢民族のあいだにも浸透している。現在の江南の地はほとんどが漢民族の居住地となっている。この地方の漢民族に蛇信仰がうまくみられ

るのは、おそらく先住民である越の人々の信仰が影響を与えたものであろう⁽¹⁴⁾。江南の地の民間では蛇はいまも神聖視される一方で怪物視される両義的な存在である。蛇は無毒の家蛇と有毒の野蛇に二分され、家蛇が神聖視されるのにたいし、野蛇は怪物視されることが多い。

太倉、蘇州などには最近まで直接に蛇を祭った蛇王廟があり、土地の神を祭った城隍廟、土地廟などにもとぐろを巻いた蛇の像がかざられていることが多かった。また、手に蛇を持つ蛇郎君、頭に蛇型のかんざしをさす蛇娘子と呼ばれる神像が立っていることもある。蛇を養育してのちにその報恩を受けたという伝説がこの神像にはまつわりついている。

この地方の人びとは蛇を宅神としている。宅神は陽宅と陰宅とにわけられる。陽宅の蛇は家を守り、陰宅の蛇は墓を守ると信じられている。金華地方では一匹の蛇が家を守っていると、これを鎮宅蛇と呼び、家のまわりで蛇を見たときにはけっしてこれを打ってはならず、茶葉や米を蛇の体の上に撒いて去るのを待ったり、香をたいて、経を唱えたりする。長期にわたって蛇の姿を見ないときには、自分の家から蛇が離れたのではないかと心配する。転居するときには、香を路上に撒いて道標として、蛇が新居に移ってくれるように願う。

陰宅の蛇も叩いたり、追ったりすることはできず、紙銭や香を焼いて、去るのにまかせる。人びとが、墓のなかに蛇の姿を見たときには、子孫の繁栄を守ってくれているのだと安心し、さらに、風水思想と関わりを持っていて、蛇の止まっている地は人が住むのに適した土地であると信じられている。蛇と龍を同じものと考えているのである。

かれらはまた家蛇を倉龍、財神、祖先の化身とみなしている。寧波地方では、青龍（青い蛇）は穀倉を管理し、黄龍（黄色い蛇）は水と米がめを管理するといいならわしている。したがって倉のなかから、蛇が姿を見せると、その家は栄えるという喜び。蛇は米を運ぶという信仰もある。

紹興地区では、毎月一日と十五日に五聖菩薩を祭る。五聖菩薩のなかには蛇もはいており、商家の繁栄を守っていると信じられている。杭州では屋内に蛇を見ると、先祖が家に戻ってきたとし、また財神があらわれたとして、焼香して拜む。

太倉地方には召蛇と呼ばれる蛇神の祭りがあった。人力を超えた天災人災に遭ったとき、召蛇の祭りを挙げて蛇神の「霊信」つまり神示を仰ぐ。召蛇を主宰したのは世襲の七人の召蛇人（蛇巫）であり、祭りの場所としては土地廟や城隍廟があてられた。七人の召蛇人のなかからさらにひとりの主祭がえられ、主祭が秘密の呪文をとえ、他の六人がこれに唱和する。祭壇上には八卦が描かれ、その上に小箱がすえられる。小箱のなかには一匹の小蛇が入れられており、頃合をみて主祭はその蛇を祭壇のまえの広場に放つ。蛇の進退、蠢動、回旋、旋首などの動きによって、主祭は慎重に吉凶の神示を判断する。

清代以前、この召蛇人は皆女性が勤めていたという。かの女たちはこの祭りで自ら身をよじて蛇のさまを真似し、その淫蕩な姿態が風俗を乱すこと甚だしかったために、十八世紀はじめの康熙年間に禁じられ、以後、男性が勤めるようになったという。しかし、今に至るまで、太倉、常熟、松江などの一帯には蛇を使って病気や傷害を治療する女たちが活躍しており、その治療法は師弟相伝で子供にも秘密にされているという。

上海や江蘇地区の漁民たちは、いまも蛇を神として信仰しており、赤いやまかかしは竜王、小さなやまかかしは観世音、赤い水蛇は漁の神である朱老太太の化身と信じている⁽¹⁵⁾。

このように江南の地方にはいまも蛇信仰がさかんである。蛇を神聖、不可思議な存在として崇拜しているだけに、他方では蛇についてのタブーも多く伝えられている。直接に蛇の名を呼

ばず、「蛮家」、「大仙」、「狐仙」、「天龍」などの隠語で呼んだり、蛇を直接に指でさしてはならず、けっして蛇肉をたべない、などである。

この江南の地に行われている蛇に関する習俗のなかで興味ぶかいのは、蛇の祟りを払うまじないである。この地方では、修練の功を積んだ蛇は龍になり、その功を積まなかった蛇は妖怪になると信じられている。妖怪となった蛇は人にたいして種々の危害を働くので、道教の法師たちによって驅蛇の法が行われなければならない。驅蛇の法にはいろいろなやり方があるが、そのなかの一つ、もっとも大きな儀礼の「大驅」は、まず道士たちによって蛇祭が行われ、米粉または紙でつくられた一匹の蛇に念入りな引導を渡した後、その蛇を剣で包囲し、道士が手でおさえつけ、塔の下に封じ込めて終わる。この信仰と祭りの手順は「白蛇伝」の骨格とそのまに一致している。当然のことながら、「白蛇伝」の構成には、この伝説を生み出した呉、越の地の蛇信仰と儀礼の次第が肉付けされてとりこまれていたのである。

中国の蛇郎伝説と日本の蛇婿入

江南の地に発生し、のちに中国全土にひろがった中国最大の蛇にまつわるいい伝えが蛇郎伝説である。いろいろなバリエーションを含めて現在では文献の記載だけで百六種のはなしが採集されており、中国の研究者によって種々の検討がくわえられている⁽¹⁶⁾。文献上では千五百年以前の南北朝時代の普代にまでさかのぼることができるが、もちろん、成立はそれ以前にある。

江南の東莞で行われている典型的な一話を次に紹介しよう⁽¹⁷⁾。

むかしむかし、七人の娘を持つ老農夫がいた。ある日、いつものように、ひとりで田に出て耕そうとしていると、一丈あまりの大蛇があらわれ頭を伸ばし、舌を出して農夫にせまり、かれの身体に巻きついて締めつけた。農夫はあまりの痛さに悲鳴をあげて蛇にいった。

「蛇郎(蛇殿)、わたしはこれまでにあなたにたいしなんの悪いこともしていないのに、なぜわたしをこんなに苦しめるのか」

「おじいさん、あなたは七人の娘を持っている。そのうちのもっとも美しい娘をわたしにしなければ、あなたを噛み殺してしまう」

蛇に締めつけられて農夫は仕方なく娘をやることを承知した。まもなくいちばん上の姉が朝飯を持ってやってきた。父が大蛇に巻かれているのを見てびっくりして、飛び退いた。かの女は遠くから父にいった。

「お父さん、ご飯をたべませんか。白い飯とお魚とスープです」

「おまえ、蛇の嫁になってくれないか」

「お父さん、蛇の嫁になるくらいなら、お父さんが蛇に噛み殺されたほうがいい」

こんな問答が六番目の娘までつづき、父はすっかり失望した。

最後に七番目の娘がやってきた。農夫はおなじように蛇の嫁になるよう頼んだ。

「お父さん、お父さんが蛇に噛み殺されないように、わたしは蛇の嫁になります」

このことばを聞いて蛇は農夫から離れた。農夫は涙を流しながら娘に別れを告げ、大蛇は雷鳴の轟くなかに娘を連れて去った。

大蛇が娘を連れていったのは金碧に光り輝く海竜王の宮殿の水晶宮であった。大蛇は美しい若者に変った。かれは海竜王の皇太子であったのだ。

一月ほど過ぎて、七番目の娘は豪華に着飾り、大勢の召使を連れて里帰りした。この妹のすばらしい幸福をねたんだのが姉妹のなかでもっとも醜い四番目の娘であった。かの女は妹に代わろうとして、だまして妹の衣装を自分が身に着けたのち妹を井戸に突き落とし上から大石を落として殺してしまった。

四番目の娘は妹になりすまして水晶宮にもどり、蛇郎と対面した。

「おまえはわたしの嫁ではない。わたしの嫁はこんなあばたではない」

「家にもどり、天然痘にかかったのです」

こんなふうには、この姉は蛇郎の疑問をすべてごまかし、水晶宮で安楽な生活を送るようになった。

殺された妹の靈魂は九官鳥となって水晶宮に飛んでき、蛇郎の手に止まった。蛇郎は籠に入れて飼っていたが、姉がこれを殺してかゆとともに煮てしまい蛇郎にたべさせ、残りを庭に捨てると、竹が生えてきた。蛇郎がその下に立つと爽やかな風が吹いてき、姉が立つと無数の竹の枝が落ちてきて髪の毛にささり、黄蜂が刺した。怒った姉は竹を切らせ、椅子を作らせた。その椅子に蛇郎が座ると爽やかな気分になることができたのにたいし、姉が座ると、するどいとげが出て、かの女の身体を刺した。怒った姉はこの椅子を燃やしてしまったが、そのときに飛び散った火の粉でかの女は盲目となった。

ある晩のこと、蛇郎は部屋の外で糸をつむぐ音を聞いて出てみると、そこにむかしの妻がいた。かの女は夫に自分の陥った運命についてくわしく語った。怒った蛇郎は姉を一刀のもとに切り殺してしまった。

この蛇郎伝説が日本の昔話の「蛇婿入」の水乞型の原型であることは疑問がない。この型の日本の昔話は次のようにはじまる⁽¹⁸⁾。

むかし、あるところの長者が娘を三人持っていた。ある朝、田にいくとすっかり干上がっていたので、この田に水を入れてくれたものには、三人の娘のなかの一人を嫁にやろうとつぶやいた。翌朝、田に行くと水がはいっていて、田のなかに大きな蛇がいた。昼になって一番上の娘が飯を運んできた。その娘に蛇のところへ嫁に行けというと、いやがって、逃げ出した。つぎに二番目の娘が飯を運んできたが、やはりいやがって逃げ出した。最後に三番目の娘が飯を運んできて父の頼みを聞き入れて蛇のところへ嫁に行くことを承知した。

ここまでは蛇郎伝説とほぼ一致している。この型のはなしはこのあと嫁入りをする娘が針と瓢箪を使って蛇を退治する筋となって中国の蛇郎伝説とはずれていくのであるが、しかし、諸国にひろがる蛇婿入のはなしのなかには、この妹が幸せになり、嫁入りを断った姉たちが不幸になるという、蛇郎と完全にモチーフの一致するはなしも少なくない。大分県の西国東郡に伝わる昔話では、蛇のところへ嫁にいった妹は立派な若者になった蛇から打ち出の小槌をもらって家に帰り、姉はいぼだらけの目の見えない物貰いとなっている。細部にまで蛇郎との類似がある。また、長野県の上伊那郡に伝わるはなしでは、妹は立派な若者の婿を連れ、美しく着飾って、三日目に里帰りをした姉たちを羨ましがらせている。

日本でもっともひろく流布している緒環型⁽¹⁹⁾については、中国で同形のはなしをまだ発見していない⁽¹⁹⁾。しかし、若干変形はしてもよく似たはなしが存在する。緒環型は蛇の正体を確かめるために身体の一部に糸のついた針を刺し、結局蛇を殺してしまうもので、蛇の神性がいちぢるしく下落してしまった時代か、蛇にたいする信仰の失われてしまっている社会でなければ生まれて来ないはなしである。蛇にたいする信仰心を基層において保持しつづけてきた中国では

生まれ難いはなしのタイプであったといえる。時代はすこし下るが、前述した宋代の『夷堅志』の「三志辛卷第五」に通ってくる女の正体を紐をたどって確かめ、大蛇と知るはなしが載っている。いまの安徽省の歴陽のある官吏の若者が墓参りのおりに、ひとりの美しい婦人と知り合う。女は毎晩通ってくるようになり、若者は痩せていった。不審を抱いた父母が道士に相談すると、道士は数十丈の紐の先に針で呪札を縫い付け、女がやってきたときに、着物の裾にその札を貼りつけさせた。翌朝、その紐をたどっていくと、百丈を超える大蛇が野外で死んでおり、札は蛇の鱗のあいだにあった。道教の道士が活躍し、呪符が大きな役割を果たしてのちの潤色が加わっているが明らかに緒環型である。また、蛇ではないが通ってくる妖怪の正体を糸のついた針で確かめるといふはなしも中国にあった。おなじ『夷堅志』にみられる例を紹介しておこう⁽²⁰⁾。「支甲卷五」には淫らな神の像が人間の女となって男のもとへ通い、男が人相をよく見る人物の忠告にしたがって、女の着物に糸のついた針を刺しておき、糸をたどって正体を確かめるはなしが収められている。また、「丁志卷十三」には、通ってくる女のためにやせ細っていく男が、不審を持ったまわりの人のことばにしたがって女の着物に針を刺し、赤い糸をたどっていくと、女はある神社の壁にかけられた肖像であったといふはなしがある。日本の緒環型の源流も中国に求められるのではなからうか。

日中の蛇シャーマン

『左伝』や『史記』、『論衡』などの記載によると、古代の呉、越の地には「紋（文）身断髪」の人々が住んでいたといわれている⁽²¹⁾。この人々と、『魏史』の「倭人伝」に水中の「大魚や水鳥を鎮める」ために「顔や身体に入れ墨」をしていたとするす邪馬台国の倭人⁽²²⁾とは同一の民族と推定するに十分な根拠がある。現在の日本の各地にみられる呉、越などの字を持つ地名は江南の呉、越と関わりがあるとみてよいし、ほかにも、文化、習俗、価値観などには、偶然では片付けられない類同性がある。呉の人々が日本に多く渡来、移住してきた実情は、平安時代のはじめに編纂された、当時の日本の戸籍ともいえる『新撰姓氏録』の諸蕃「漢」部によっても確認される。当然、江南の呉、越の文化とともにその蛇信仰もまた日本に入ってきたはずである。

吉野裕子氏は蛇を頭に巻く縄文の土偶や連続三角紋を身につけた古墳時代の埴輪から日本の古代に蛇を祭る蛇巫が活躍していた可能性を推定しておられる⁽²³⁾。吉野氏は、現在も中国の江南の地に活躍している召蛇人と呼ばれる蛇巫については何の知識もなくこの説を立てられたのであるが、氏の説の正しさはもはや実証されたといってよいであろう。先に江南の太倉、蘇州などに蛇を祭った蛇王廟や土地廟があり、そのなかに蛇郎君、蛇娘子と呼ばれる神像が立っていたことにふれた。これこそが中国の古代の蛇巫なのである。この二体の神像について姜彬氏は大略次のように述べておられる⁽²⁴⁾。

手の中にとぐろを巻いた一匹の小さな蛇を持っている青年の神像は蛇郎君といい、頭上に蛇のかたちをしたかんざしをさしている婦人の神像は蛇娘子と呼んでいた。太倉の土地廟にこの神像があつた。この神像のうち、蛇郎君には呉語地域にひろく行われている伝説がある。むかし、ひとりの読書好きの少年がいた。かれは一匹の小蛇を拾って帰り、小さな箱に入れて育て、読書機のなかで遊ばせた。かれは自分の食べ物に分けてやった。やがてこの少年は

成長して科挙の試験を受けに行くこととなり、蛇を山に放してやった。のちに蛇はこの少年の恩に報いたという。蛇娘子は、むかし呉語地域の婦人たちが頭に銀でつくった蛇型のかんざしをさしていた風俗を反映している。

このような蛇を祭る習俗の存在は清代の文献にも出てくる。江蘇省の常州の一般人家では幽暗の一室を設け、人頭蛇身の神を祭っていたという。今年（一九九一年）八月、上海にいたわたしは、姜彬氏に依頼してこの太倉や蘇州の蛇王廟の所在の確認につとめたが、惜しいことにすべて失われ、跡地は劇場などに変わっていた。しかし、吉野氏の説と照合して、この蛇娘子が女性蛇巫であることは信じてよい。かの女は蛇のかんざしをさしていたのではなく、もともとは生きた蛇を頭に這わせていたのであろう。また、蛇郎君については、これも吉野氏が紹介している『常陸風土記』のヌカヒメの話に合わせて考えるべきであろう。次のような梗概である。

むかし、茨城の里にヌカヒコ、ヌカヒメという兄妹が住んでいた。妹のヌカヒメの許へ名も知れない男が通ってくるようになり、やがてかの女は一匹の小蛇を生んだ。兄妹は神の子として清浄な^{つく}環に入れて壇上に安置しておいたところ、一夜で大きくなり、次に^{ひつ}盆に入れて育てたがそこにも入れなくなった。妹が子の蛇にむかい、養いきれないので父のもとへ去れといったところ、子の蛇は怒って兄を殺して天へ上ろうとした。母が盆をなげつけたので蛇は天に上らず、峰に住むこととなった。蛇を育てた盆などは神社に祭られている。

この話を前述の呉語地域の伝説と比較すると、小蛇を小さな容器に入れて育てる蛇巫の存在が明らかになってくる。その蛇は壇上に飾られて神聖視されていたことも推測される。蛇巫はこの蛇を用いて蛇祭を行い、広場に放った蛇の動きから神示を受け、卜占、病気・傷害などの治療に当たっていた。大きくなりすぎた蛇は山野に帰された。蛇巫は兄妹でセットになっていることが多く、女巫は頭に蛇を巻き付け、男巫は手中で自在に蛇を操ってみせた。女巫は小蛇の出自を神秘めかしていたために、かの女が親蛇と交じわって生まれた子であるという伝説が生まれた。

この蛇巫の伝承に加えて、三輪山伝説、加茂神話、諏訪神話、『平家物語』や『源平盛衰記』などにのべられる緒方三郎伝説、各地にひろく残されている蛇婿入りの話などから判断して、日本の古代社会に蛇トーテミズムや蛇信仰が存在したことは疑問がない。ただこれらの伝承に登場する関係者、とくに蛇が殺害されたり不幸な死に方をしているところからも明らかのように、日本人は早い時期に蛇に対する信仰を変質させ、蛇をおぞましいものとみる観念が支配的となっていた。恐らく仏教の輪廻転生の畜生観がもっとも大きな影響を与えたものと思われるが、もちろん、理由はそれだけではない。複雑な日本国家の形成の過程で蛇信仰を持たない民族の抵抗があったことも考慮しなければならない。その点で、いまなお蛇トーテミズムや蛇信仰を保存している中国と大きな相違がある。

深江村に母とふたり暮らしの若い医者があった。彼はまだ独身者でちょうど嫁を探している時であった。

ある年の夏、夕立があった。深江の庄屋の軒下にひとりの美しい娘が雨宿りをしていた。夕立と思って晴れるのを待っていたが、なかなか止みそうもなく、そのうちにととう地雨になってしまった。日も西に傾いてきた。庄屋の家の人たちは見知らぬ旅の娘が自分の家の軒下に雨宿りをしているのを見て、可哀想に思って、雨の晴れるまで家に入ってゆっくり待つがよかろうと言って親切に家に招き入れた。

夕立がきっかけとなって、旅の娘と若い医者が出会い、ふたりは結ばれる。そして幸せに夫婦生活をいとなむふたりのなかにはやがて愛の結晶が誕生する。島原半島で語られている昔話「蛇女房」の冒頭である。雨、医者、男女の出会いと、中国の「白蛇伝」を思わせる筋立てであるが、それ以降の展開はまったく違っている。昼寝の最中に蛇の正体を見られたこの女は、以前、海辺で命を助けられた普賢岳の池に住む蛇であると名乗って姿を消す⁽²⁵⁾。

日本人は神話や昔話のレベルの想像の世界でも蛇と人間との結婚を認めようとはしていない。「蛇性の姪」の女主人公真名児の不幸は、この日本に生まれたことにあったのである。

注

- 1 『室町時代物語大成第十』角川書店、一九七九年。
- 2 中国・海峡文芸出版社、一九八九年。
- 3 「『白蛇伝』と『蛇性の姪』」『日本古典の内と外』笠間書店、一九七七年。
- 4 『神話の系譜』青土社、一九八六年。
- 5 『浙江省民間文学集成・寧波市故事巻』中国民間文芸出版社、一九八九年。
- 6 注5。
- 7 注5。
- 8 中国、学苑出版社、一九九〇年。
- 9 中国・中華書局出版、一九八一年。この文献については、前上海社会科学院文学研究所所長姜彬氏から教示を受けた。これに限らず、同氏からは、本稿を成すにあたり、多くの教示を受けた。厚くお礼を申し上げる。
- 10 林蔚文「越人蛇崇拜の源流略考」『民間文学論壇』中国民間文芸出版社、一九八六年第三期。
- 11 注10。
- 12 注10。
- 13 鄧廷良著、王矛・王敏編訳「IV古くて神秘的な西南シルクロード」『謎の西南シルクロード』原書房、一九九一年。
- 14 繆亜奇「江南漢族蛇崇拜習俗考察」『民間文学論壇』中国民間文芸出版社、一九八七年第五期。
- 15 王水「吳越漁民の信仰と習俗の調査」『民間文芸季刊』新華書店上海出版社、一九八九年六月。
- 16 劉守華「蛇郎故事比較研究」『民間文学論壇』中国民間文芸出版社、一九八七年第六期。
- 17 袁洪銘「蛇郎一東莞童話一」『民俗』国立中山大学語言歴史学研究所編刊、一〇八期。
- 18 関敬吾「婚姻・美女と獣」『日本昔話集成第二部の一』角川書店、一九五三年。
- 19 注18。
- 20 注9。
- 21 注15。
- 22 「『魏史』倭人伝を通読する」『日本の古代1倭人登場』中央公論社、一九八五年
- 23 『蛇 日本の蛇信仰』法政大学出版局、一九七九年。

- 24 「長江下流地区古代蛇図騰崇拜の遺留」『日中文化研究第二号』勉誠社、一九九一年十月。
- 25 関敬吾『島原半島昔話集』岩崎美術社、一九七七年。

あとがき

本稿は学習院大学東洋文化研究所を通して受けている社団法人昭和会館一九九〇年度助成金による中国大陸の祭りと芸能の調査研究の成果の一部である。両機関にたいし心からのお礼を申し上げる。

Snake Worship in Chiangnan, China and in Japan

SUWA Haruo

Manago, the heroine of "Jasei no in" in Ugetsu Monogatari, a masterpiece by Akinari Ueda, loves a human although she is a snake. She changes her appearance, follows the man and is finally exterminated by Houkai, who is a Buddhist priest of Dojoji Temple in Kii Province. The story reflects the Buddhist idea that snakes should be hated and that love between snakes and humans should not be allowed. The idea that snakes should be hated is found in a novel in colloquial Chinese in the Ming dynasty which is a source of the story. Akinari sympathized with the idea and used the story in his novels. However, people in Yueh, which existed in the Chiangnan district in China until the 3rd century, together with the people from Wu, worshiped a snake as their God. Hakuajaden (the story of the white snake), the theme of which is love between a white snake and a human youth, and Jaroudensetsu (the legend of the snake), whose theme is also love between a snake and a human, were created and spread everywhere in China by the Yueh people. In such folk tales, we can find examples of snake worship, which cannot be seen in stories such as the novels in colloquial Chinese created by the intelligentsia. The snake worship in Chiangnan was probably introduced to Japan by Wu and Yueh immigrants. Snake shamanism, which was found from the Jomon Era to the Yayoi Era in Japan, still exists in the Changnan district. Jaroudensetsu in China turned into Japanese folk tales. Hakuajaden, which crystallized into "Jasei no in", was also introduced from China in early times and was turned into Japanese folk tales.

中國江南的蛇信仰和日本

諏訪春雄

上田秋成的名作《雨月物語》“蛇性之淫”中的女主人公真名兒原本是一條蛇，却愛戀上了人間的男性。其不斷地變化形態，追隨自己喜愛的男子，最後她被紀伊國道成寺的法海和尚制伏。此故事反映了佛教忌諱蛇、不允許人蛇相戀的畜生觀。這種忌諱蛇的思想在中國明代的白話小說中也明顯地存在着，上田秋成與此思想有着共鳴，因此以明代白話小說為藍本創作了此作品。但是，公元三世紀之前，中國江南地區的吳、越兩國十分昌盛，尤其是越人將蛇作為祖神來崇拜。崇拜蛇的越人們創作出了以白蛇與年輕男子相戀為主題的“白蛇傳”以及同樣表現蛇與人相愛的“蛇郎”傳說等作品。這些傳說故事又由他們傳播到了全國各地。在這樣的傳承世界中存在着一種對蛇的崇拜之情。這樣的崇拜之情，在知識分子創作的白話小說中是看不到的。江南的蛇信仰很可能隨着吳越人的移居日本而傳到日本各地。流行於繩文、彌生時代的蛇巫，今天的江南地區仍然存在着。中國的“蛇郎”傳說傳到日本而變成了“蛇婿”的昔話；孕育出“蛇性之淫”的白蛇傳也在相當早的時期從中國傳到了日本。總之，在昔話的世界中可以看到蛇信仰在日本變化的形態。
